



貼り絵をする入居者。完成品は施設に飾られる



天気良ければ外出することも



居室には、自分でつくったという花飾りが



入居者とのかわりでは“笑顔”を欠かさない

## 一人ひとりと 真摯に向き合い 何をしたいか 読み取って ケアに反映

群馬県の中南部に位置し、人口が県内で最も多い都市として知られる高崎市。中心市街地から少し離れた住宅街にあるグループホームが、「けあビジョンホーム高崎」だ。

同施設を運営する株式会社ビジュアルビジョンは、もともと教育事業から始まった。ほかにもグループ内では料飲事業や不動産事業などを幅広く手掛けているが、どの事業でも共通しているのは「困っている人を助けたい」という思いが根底にあること。

そして、サービスを  
利用する人たちが  
「幸せになってほし  
い」という思いだ。

介護事業であれば  
「利用者」や「利用者  
家族」が当てはまる。

「誰しも『介護施設  
に入りたい』とは思  
わないですし、仕方  
なく利用を始めた人

が多いはず。しかし、現在入居されている方たちは『これまでの日本を支えてきた人たち』ばかり。

そんなご入居者のために何ができるかを念頭に置いて、日々ケアをしています」と、ホーム長の若林裕通さんは話す。そのため、職員側から行動を強制せず、「好きなことをしてもらおう」という姿勢を徹底。職員にも「これをしましょう」と指示するのではなく、「入居者からこれがしたい」という声があったら私たちがお手伝いします」という思いでやってほ

しい」と伝えている。実際、共用部に入ってみると、職員とおしゃべりをしたりソファでくつろいだりと、思い思いに過ごす入居者の姿があった。

ケアの際に心がけていることは、「家族を越える愛情」。介護事業を担う「介護保育部門」の理念には「高齢者の方には家族を越える愛情で人生を包み込み、世界中の人々の幸せに貢献する」という一文が記されている。長年一緒にいた家族の愛情を越えることは、なかなか難しい。だが、その思いをもって接しているからこそ、手厚いケアにつながっている。「日常のケアでは、『よく観察すること』を意識しています。ずっとかわかっていけば、その方が今何を必要とされているのか、何をしたいと思っているのかわかってきます。ただ、職員が先回りして手を出してしまうと、ご入居者の身体機能を落とすことにもつながりかねません。そうではなく、相手の行動を把握することによって、こちらの行動も変わってくるのではないかと考えています」

さらに、入居者とのかわりで大切にしていることが、笑顔とことん話を聞くこと。笑顔は「人のためにある表情」だと考えているためだ。どんなに症状が強く出ている人でも、職員が笑顔でいれば相手も穏やかになるという。ことん話を聞くことでは、「受容」「共感」「傾聴」の姿勢を念頭に、何を訴えたいのかわかるまで聞くようにしている。「業務が多いと話を聞く時間も少なくなる」とはわかりますが、聞かないと「何を訴えているのか」がわからない。だからこそ話を聞くようにしていますし、話しやすい雰囲気づくりも大切にしています」

続きは、本誌5月号をご覧ください